

自然を歩く 19

【長者の髭】

近世の京や近江では「藪」といえば竹藪を指すことが多かったと思われる。現在では筍の産地となったところでは養生された竹藪はモウソウチクが多い。しかしモウソウチクは薩摩藩が中国から元文元年（1736）に輸入し栽培したのが始まりでそれ以降広がったといわれる。だから芭蕉が「野ざらし紀行」で詠んだ「秋風や藪も畠も不破の関」の「藪」はモウソウチクではなくマダケの藪かハチクの藪であろうと推測している。近江に住んで湖東平野の村々をしばしば歩くけれども、このあたりは水田が一面広がる中に島のように集落がある。そして集落の周辺にはマダケやハチクの藪があるところが多い。マダケは竹細工用にするし、ハチクは稲の架（はざ）にするし、壁の下地にはなくてはならないものだった。ハチクは筍としても旨い。竹藪をもっている家は裕福な家が多く、それで竹藪のことを「長者の髭」と言ったそう。芭蕉は不破の関の荒廃を藪と畠で表したが、農民の側から言えば竹藪は裕福の象徴であった。それで芭蕉に応答して「竹藪は長者の髭よ秋の風」と問いかけてみた。